



函館港若松ふ頭を拠点とした クルーズ振興 「ザ・シンポジウムみなと in 函館」

「ザ・シンポジウムみなと」実行委員会*

観光立国の実現に向け、外国クルーズ船誘致が政府の新しい経済対策に位置づけられたところで、北海道におけるクルーズ船寄港も増えてきています。平成28年のクルーズ船寄港実績が道内でトップになった函館港では、観光地に近い若松ふ頭においてクルーズ船対応岸壁の整備が進められることになりました。

そういった中、「ザ・シンポジウムみなと in 函館」(主催：北海道経済連合会、(一社)寒地港湾技術研究センター、国土交通省北海道開発局などによる実行委員会)が、平成29年1月21日、約250名の参加により函館アリーナで開催されました。

このシンポジウムでは、クルーズライターの上田寿美子氏の基調講演とともに、「函館港若松ふ頭を拠点としたクルーズ振興について」をテーマに、函館における新たなクルーズ観光方策を考えるパネルディスカッションが行われました。

本稿では、そのうちパネルディスカッションの概要について紹介します。

パネルディスカッション

函館港におけるクルーズ船誘致

工藤 函館には函館山の夜景や歴史的な街並みなどさまざまな観光資源があり、さらに四季折々の景色や食の魅力にも高評価を得ています。そして北海道新幹線が開業し、近くに空港もある函館は、観光資源や交通手段がコンパクトに集積したまちでもあります。こうした利点を生かし、交流人口を増やしてまちの活性化につなげたいと考えています。その有効手段の一つがクルーズ客船の誘致です。

笹島 函館港では、現在、クルーズ船は港町ふ頭と赤レンガ倉庫群近くの西ふ頭を利用していますが、将来はJR函館駅と函館朝市のそばにある昔の青函連絡船のふ頭を改良した岸壁に接岸することになります。

完成すると、特急が着く駅から全国で一番近いクルーズ船の岸壁が、この若松ふ頭になります。函館駅から海の方を見ると、巨大なクルーズ船が目の前に

* 北海道経済連合会、(一社)北海道商工会議所連合会、北海道港湾協会、(一社)寒地港湾技術研究センター、(一財)港湾空港総合技術センター、北海道、国土交通省北海道開発局

ガ・シン・ポ・ン・ウ・ム みなとin函館



コーディネーター
沖田 一弘 氏
(株)日本海事新聞社編集局
取材部長



パネリスト
工藤 壽樹 氏
函館市長



パネリスト
上田 寿美子 氏
クルーズライター

どんと居座る格好となり、迫力満点の光景になります。このようにクルーズ船の寄港は、まちの景観を劇的に変えます。ふ頭の完成は公式には平成30年代前半ですが、一日も早い実現を目指します。

乗船客へのおもてなしは

沖田 まず最初のテーマとして、函館に来た乗船客にどうしたら楽しんでもらえるか。現状の取組と併せて、お話をお聞きかせください。

折谷 港町ふ頭が整備されて初めて大型客船が寄港したとき、「ようこそ函館へ」という気持ちを込めて、函館名物いか踊りを岸壁で披露しました。最近は地元との交流が乗船客に感動を与えると考え、岸壁にテントを張っていか飯を振る舞うなど体験・交流型の歓迎行事に力を入れています。

高田 函館の歓迎行事は、函館市の港務艇「つつじ」によるカラー放水、茶道や華道の体験、遺愛女子高等学校の吹奏楽演奏を含めて好印象を得ていると聞いています。

函館は海のまちなので、海鮮を振る舞うバーベキューをしても良いと思います。また、函館は戊辰戦争（慶応4（1868）年、戊辰の年1月から翌年5月にかけて、維新政府軍と旧幕府派との間で行われた内戦）の戦場なので、大砲など歴史遺産を活用するのも一案です。

上田 函館港をはじめ国内各港での歓迎行事は、日本人が思う以上に外国のお客さまはとても評価しています。寄港地で一番印象に残ったのは、観光地ではなく地元住民の歓迎やふれあいという話をよく耳にします。

しかし、歓迎行事が市民の多大な負担にならないよう、クラブ活動やカルチャー教室の成果発表の場とするなど、目的意識を持って楽しんで取り組めるようにしてほしいと思います。

井上 朝市ではおもてなしの一環として、加盟150店舗全店で歓迎ののほりを揚げ、朝市全体で歓迎しています。今後は、乗船客限定の特典やサービスなども検討していきたいと思っています。

笹島 2014年に室蘭ではクルーズ船の乗組員と地元中学生によるサッカーの試合を行い、スポーツを通じて交流を深めました。また、宮崎県日南市では、高校生が乗船客の観光案内をしています。自分のまちを見つめ直すきっかけにもなり、市長に観光に関する課題を提言しています。乗船客との交流は、歓迎する側にとっても地元を考える好機になり、人材育成や地域政策へのかかわりにもつながる大切な取組だと思います。

沖田 船会社のアンケートによると、乗船客にとって地元の歓迎行事は、早く観光に出掛けたい入港時よりも、時間に余裕がある出港時の方が参加しやすい、という結果が出ています。ですから、より参加者が多く、印象が残りやすい出港時に多くの市民により見送ることが、函館の寄港回数の増加につながります。

寄港地の観光を魅力的にするには

沖田 歓迎行事だけでなく、下船後の観光もとても重要なポイントです。寄港地の観光をより魅力的にするにはどうすべきかを伺います。

高田 一番の魅力は、若松ふ頭自体にあります。こん



パネリスト
井上 敏廣 氏
函館朝市協同組合連合会
理事長



パネリスト
折谷 久美子 氏
NPO法人スプリングボード
ユニティ21理事長



パネリスト
高田 悟 氏
株式会社北海道
函館支店長



パネリスト
笹島 隆彦
国土交通省北海道開発局
港湾空港部長

なに岸壁の近くにJRの駅や市電、バスターミナルといった交通網があり、そこから各方面に簡単に移動できるのは、函館観光をアピールする上で大きなメリットになります。新幹線開業で移動時間が短縮されたので、南北海道と北東北をまたぐ広域の商品開発にも力を入れたいです。一方、英語と中国語ができるバスガイドが函館に少なく、毎回札幌や東京から呼んでいます。通訳ができるだけでなく、歴史の知識があって面白く語ることができる人材の養成は急務です。

上田 クルーズは想像以上に船上で過ごす時間が長く、時間に余裕があります。ですから、船上で事前に函館の歴史や文化を紹介する機会があると、観光への参加者は増えると思います。

工藤 函館は狭い範囲に観光名所が多く集まっているので、まち歩き観光をPRしています。1日ですべてを回り切りたい乗船客にとって、函館はうってつけのまちだと思います。また、通年でイベントがある「フェスティバルタウン」も形成しようとしています。クルーズ船の入港時には常に何かが開かれているまちにしたいと考えています。

折谷 客船には、乗船客以外にもたくさんのクルーズが乗っています。湯の川温泉の日帰りツアーなどクルーズを対象にしたサービスを提供してはどうでしょうか。

クルーズ船寄港による経済効果を高めるには

沖田 国内各港が客船招致に動く理由はまちの活性化もありますが、1回の寄港で何千万というお金が落ちる経済効果を期待する側面があります。クルーズ船寄港に

よる経済効果を高めるための方策について伺います。

井上 2016年9月から朝市では、外国人観光客向けに免税手続きや海外宅配などを受け付ける、総合インフォメーションカウンターを開設しました。利用者は日増しに増えており、12月までの免税の売り上げは店舗数22店舗で約400万円でした。今はホタテの貝柱が中心ですが、今後はそれ以外の主力商品の発掘が課題だと思います。

上田 クルーズは滞在時間が短いので、乗船客が何軒も店を回るのは難しく、効率的に買い物ができる仕組みが重要になってきます。外国船では地図を配布したり、ショッピング説明会を開くなど情報提供の場を設けるケースがあります。基調講演の中で、船の総料理長は港のそばに良い市場があると、自ら出向いて船上のメニューに出す場合があるとお話ししました。それが進化し、「料理長と行く市場ツアー」というような企画を実施している船もあります。若松ふ頭は朝市が近く利便性が高い上、プロの案内人が付くことにもなれば、ほかの市場との差別化が図れます。

沖田 乗客定員2000～3000人クラスの大型船が寄港すると、昼食による経済効果も見逃せません。

上田 寄港地の飲食店の最大のライバルは、船内の食事です。船に戻れば無料で食べられるわけですから。外国のお客さまは、地元の名物料理をインターネットで調べて、ピンポイントで訪れる傾向にあります。天下一品の海鮮丼がある函館は水産物の宝庫。地元ならではの名物の情報を積極的に発信することが大切です。

また、土産物店や飲食店が写真入りのメニューや外国語表記を増やすことも、効果があるでしょう。

工藤 函館は近くに空港があり新幹線も開通したので、「フライ&クルーズ」や「レール&クルーズ」が可能です。寄港だけでなく横浜や神戸のように発着便ができれば、函館港の拠点化が実現可能です。そうなれば食材など物資の積み込み、あるいは乗組員の交代の基地となり、新たな経済効果が生まれると思います。

市民にクルーズ船の乗客になってもらうには

沖田 最後に、函館からの乗船客を増やす方法について考えていきます。そのためには、港に来てもらい実際にクルーズ船を見てもらうのがきっかけの一つになると思いますが、いかがですか。

折谷 クルーズ船を撮影に来る市民は多く、若松ふ頭に寄港するようになればもっと増えるはずです。「いか飯の振る舞いを手伝いませんか」と気軽に声を掛け、港まで足を運ぶ人を多くしていきたいです。

笹島 金沢港では客船の入港・出港時に、来た人にスタンプカードを配布し、10個たまるとオリジナルのハンドタオルを配る試みをしていますが、リピーターは数千人に達しています。あまり費用を掛けずに、ちょっとしたインセンティブを与えることで多くの人が港を訪れています。

工藤 函館でも徐々にクルーズが浸透し利用者が増えています。今後は市民対象の船内見学会などで親しくしてもらい、クルーズ需要を喚起したいと思います。また、首都圏や海外などでも積極的に客船誘致活動を行い、若松ふ頭完成後は、現在の2倍となる年間70隻の寄港を実現させたいと思います。

高田 飛鳥Ⅱの船内見学会では、船内の部屋を借りて説明会を開きました。年2回開催し、参加者は50～100人です。こうした活動をきっかけに、クルーズの楽しさを知ってもらえればと考えています。また、市民クルーズをチャーター船という形にすれば、函館市民に乘る楽しさをもっと味わってもらえると思います。

笹島 クルーズはプレゼント商品として成り立つので

はと思います。プレゼントは、いつでも買えるものより、なかなか手にできないものや考えもしないものの方が喜ばれます。函館市民を対象にしたワンナイトクルーズをプレゼント用に商品化するのも一案です。

沖田 上田さん、今までの議論を踏まえて函館港の将来像についてお聞かせください。

上田 私はこれまで世界中の港から船に乗りましたが、乗船が憂鬱になる港があります。それは、治安が悪い場所にある港と、空港や駅から遠い港です。若松ふ頭は街中にあり、駅からも空港からも近い。クルーズ振興を図る上で地の利がいい函館は、日本を代表する拠点港になる可能性を秘めています。また、市民の皆さんが熱心に取り組まれている歓迎行事は、とても高い評価を受けています。そういうおもてなしの心が客船誘致の実現につながると思います。しかし、その一方でクルーズ会社が寄港地を選ぶ判断基準は、乗船客の数です。これからは、日本でもクルーズ旅行を気軽に楽しめる環境が整っていきます。函館の方々には、ぜひクルーズの旅を楽しんでいただきたいと思います。

沖田 全国の港の中で、函館の歓迎やクルーズ船誘致の熱意はベスト3に入ります。函館は乗船客に「また来るよ」と言ってもらえることが可能な地だと思います。また、上田さんのご指摘どおり、船会社が寄港地を決める基準はそこから乗船する客数です。数年前、日本の5つの港に入港予定だった船が3つに絞り込んだ際、決め手になったのは乗船客の数でした。函館から20～30人が乗船するようなマーケットをつくり上げれば、ほかにライバルはいないと思います。

最後に工藤市長の抱負をお聞きして、今回のシンポジウムを終わりにしたいと思います。

工藤 このシンポジウムは、函館のまちの魅力と函館港の可能性を改めて考える機会になったと思います。今日のご意見やご指摘を課題として受け止めて、若松ふ頭を拠点としたクルーズ振興にこれからも一生懸命に取り組んでいきます。当面の目標は70隻の寄港です。実現できるように頑張ります。